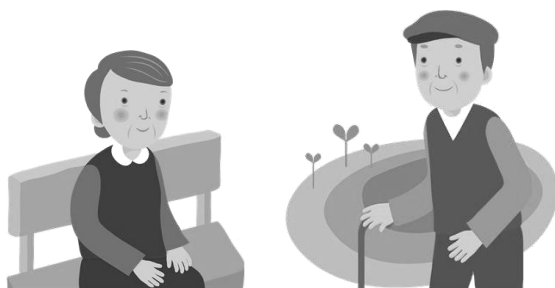


こんなことも… 協働の☆☆ まちづくり



(参考文献 まちむら2010年10月号)

高齢者同士で支え合う、週に一度の「ふれあい朝市」 (福岡県北九州市茶屋の原団地自治区会)

高齢化が進む北九州市八幡西区の茶屋の原団地では、平成21年4月から毎週火曜に「ふれあい朝市」を開催しています。朝市の運営はすべて団地自治区会の手で行われ、商品を出品・販売するのも地元の農家等がメイン。買い物客も7割以上は団地の住民が占める、住民による住民のための朝市です。

これまで住民の日常生活を支えてきた団地内のスーパーが、郊外にオープンした大型商業施設に客足を奪われ撤退。団地から歩いて行けるスーパーがなくなり、また、路線バスも利用者減を理由に縮小を余儀なくされました。

茶屋の原団地自治区会長の吉川三十郎会長(75)は、住民の要望を受けて市役所へ相談し、巡回バスを出してもらえるようになりましたが、何かと不都合が多かったそうです。

やはり地域の状況を一番理解しているのは住民自身であり、自分たちが必要なことは自分たちが中心になって進めないと解決は難し

い。そこで閃いたのが「朝市」でした。「毎日、店頭に沿う品が並ぶわけではないが、週1日の朝市ならば採算がとれるし、日常の食品は手に入る」そう考えた吉川会長のアイデアは、自治区会の役員会を経て総会でも喜んで受け入れられました。

早速、朝市の視察に回ったものの、各地で行われていた朝市の半数は、半年から1年ともたず開催を中止しており、運営に様々な経費がかかる実態に気がつきました。

「場所代や手数料などの経費を無くせば商品をより安く出せる。そうすれば団地の住民に喜んでもらえるし、継続的な朝市が実現するかもしれない。朝市に買い物客が集まらず中止する事態になっても、その時は地域のみんなも納得してくれるだろう。今できることをやるだけやってみよう」そう決意して、団地から6年前に撤退した地元スーパーに「空き店舗の軒先と駐車場を、朝市の開催場所として無料で貸して欲しい」と直談

判。スーパー側は驚きながらも、快諾してくれました。

自治区会の高齢化対策委員会が中心となって、経費を無くすために商品の陳列台やのぼりの設置から、片付け、清掃、広報活動に至るまで、すべて自分たちの手で行い、朝市関係者に出店してもらえよう交渉するときは、「場所代や手数料はとらず、誰が、何を、どのように販売するのかという規制も設けない。その代わり、出来る限り売値を安くして欲しい。」と依頼しました。近隣の農家をはじめ、休耕地を借りて野菜を作る住民、魚の仲買資格を持つ住民等も集まって、平成21年4月、第1回目「ふれあい朝市」を開催。

その後も朝市の評価や希望商品についてアンケートをとる等、朝市の活性化に努め、現在では毎回約20店舗が出店し、250名前後の買い物客でにぎわう地元の名物朝市へと成長しました。

「何も買わなくても来てくれるだけでいい」という思いから名づけられた「ふれあい朝市」が、自治区会や出店者の枠を超え、住民の間にも協力の輪が大きく広がっています。